

〔論 説〕

## 妖精の贈り物

花 田 文 男

1

まず11世紀初めのヴォルムスの司教ブルヒャルトが編纂した教会法集成から興味ある一節を長くなるが引いてみよう<sup>(1)</sup>。

ある者たちが信じていること、すなわち民衆によってパルカエ Parcae と呼ばれている女たちが存在する、あるいはパルカエは次のようなことをなす力があると汝は信じたか。すなわちある者に男の子が誕生すると、女たちは望む方に彼を導く力を有し、ためにこの男は望む時にはいつでも狼に変身したり、民衆の愚かさが人狼 weruvolff と呼ぶ他の何かの姿に変身したりできることを信じたか。神の姿が他の形や見かけに、全能の神によってではなく何かによって変えられるなどということが起きたり生じうることをもし汝が信じていたら、パンと水で十日間の贖罪をしなくてはならない。ある者たちが信じていること、すなわち森の女 sylvaticae とも言われ肉体をもつとされる田野の女たち agrestes feminae が存在すること、またその女たちは望む時にみずからの姿を愛人たちにあらわし、彼らと喜びをつくし、同様に望む時に姿を隠し消えてしまうなどと信じたか。もし信じていたら、パンと水で十日間の贖罪をしなくてはならない<sup>(2)</sup>。

(1) Burchard von Worms については次を参照。G. Duby, *Le chevalier, la femme et le prêtre*, Paris, Hachette, 《Pluriel》, 1981, pp. 63-82 (『中世の結婚』篠田勝英訳, 新評論, 1984年, 100-127ページ)

(2) Burchard von Worms, *Decretum, Patrologie latine*, t. CXL, col. 971, cité par L. Harf-Lancner, *Les fées au Moyen Age, Morgane et Mélusine. La naissance des fées*, Paris, Champion, 《Nouvelle Bibliothèque du Moyen Age》, 1984, pp. 23-24.

当時の信仰では、人の誕生にあたってローマ以来の運命の女神パルカエがあらわれるものとされた。しかし彼女たちが与えるのはかならずしも好運ではなく、変身の力とりわけ人狼となる運命である。時には森の女、田野の女と呼ばれる女たちが男の前にあらわれ、彼らの愛人となる。後におそらくは男が何らかの禁忌に触れて姿を消してしまう。Sylvaticae, agrestes feminaeあるいは先の Parcae は妖精を時の聖職者がこのように呼んだのではなかろうか。妖精のメリュジーヌもこのようにして水辺で騎士の前にあらわれ、彼に富と子供を与えたのだ。ただここではまだ誕生にあたって好運、時には不運を与える妖精の姿は明確ではない。さらにブルヒャルトは続けている。

前述の質問は男女に共通のものであるが、次のものはもっぱら女たちにかかわることである。ある女たちが一年のある時期に行くこと、すなわち汝の家の中で食卓の支度をし、食事と飲物と三本のナイフを食卓の上に並べなかったか。それも昔かたぎの者と昔からの愚かさがパルカエと名付ける三人の姉妹が来たら、そこで力を元に復してもらうために。また神への尊崇をないがしろにし、彼の力と名を捨て、悪魔に引き渡さなかったか。すなわちこうして汝が姉妹であると言う女たちが、現在においてか未来においてか汝にとって役に立つと信じなかったか。もし汝がこうしたことを行ったり同意したならば、一年間法定の祭日に贖罪をしなくてはならない<sup>(3)</sup>。

食卓を整える儀式が誕生に際して行われたかどうかは定かでない。女たちに限られた、しかも一年のある時期 in quibusdam temporibus anni に行く風習とあるから、むしろ女たちが多産と豊穰を祈願するものであったかもしれない。ただしここにいたって目的はともかく、運命の女神を進んで迎える習慣が述べられる。女神の数も三人の姉妹 tres illae sorores と定められる。もちろんローマ神話のパルカエの三人姉妹と並ぶ数であろう。彼女らをもてなし加護を求める作法が、飲食物とそれを食する三本のナイフという形で具体的に語られる。これは近代にまで続く民俗的習慣、文芸の中にあらわれる儀式とまったく同じである。

(3) *Ibid.*

ギヨーム・ドーヴェルニュは13世紀の前半にパリの大司教であったが、その著作の中で次のように記している。

次に運命 *fatum*, 運命の決定 *fatatio*, および民衆が魔法をかける者 *fatatae* と呼ぶ運命を定める力 *fatandi potestatem* をもつと言われる人々の問題に移ろう。このような人々は存在するのかもしれないのか、またこの運命の決定とはこの語を用いる者の意図によれば一体何であるのか<sup>(4)</sup>。

ヴォルムスのブルヒャルトが用いた *Parcae* の語はここではすでに *fatatae* (別の場所では *fata* とも) に置きかえられている。中世の妖精に名実ともによほど近づいたと言うべきであろう。ギヨーム・ドーヴェルニュはさらに続ける。

しかし今日にいたるまで多くの国民あるいはおそらくすべての国民の間には次のような観念が存在する。すぐれた騎士 *milites* の多くは運命を授けられた者 *fatatos* と言われており、すなわち彼らに起る大事件は事の起る前に神によってか女神によってかあらかじめ運命づけられるか予言されている。ある者はこのようなことを前もって運命づけたり予言したりする女神 *deae* がとりわけ人の誕生に際して存在すると述べている。おそらく同様の話とか主張によって、人々は女神たちが生れてくる子の行くたて *eventus* について相談しているのを聞いたと言っている。人の誕生に際しては神よりも女神の方が出産に力を貸すのに好都合と考えているのだろう。このようなことは迷信あるいはほとんど年よりのたわ言とも見られようが、うわさとしてもお話としてもほぼ一般に言われており、古人の多くは運命を授けられた者であるとされ、私の生地からさして遠くない所の今日のある者さえもそうなのである<sup>(5)</sup>。

(4) Guillaume d'Auvergne, *De Universo*, I, 3, chap. XXIV, cité par L. Harf-Lancner, *op. cit.*, p. 52.

(5) *Ibid.*, p. 53.

英雄的な騎士は運命を授けられた者と呼ばれ、大事をなす前にすでに女神によって運命づけられているのである。この信仰は多くの国民 *nationes* のものであり、筆者の身近に見聞するところのものでもあった。しかも運命を授けるのは人の誕生に際してである。時には女神たちは生れてくる子の運命について互いに相談する。女神の来訪に際して、生れてくる子の親が彼女たちを食事などによって歓待したかどうかは筆者は書きもらしたかどうか、記していない。ところが食事による神々の歓待は別の場面であられる。筆者が悪魔 *demones* と考える *dominam Abundiam* の語源を説明した後で、ギヨーム・ド・ヴェルニユは次のように女神 (*dominas* あるいは *dominas nocturnas* とも) をもてなす風習を記している。

この女神たちは家の中に置かれた食べ物や飲み物を、飲食物がなくなったり減ったりするわけではないが、とくに食べ物のつぼが開けられ飲み物のつぼがふたをされずに夜中に彼女らのために置かれていると、それらを食べたり飲んだりするといわれる<sup>(6)</sup>。

豊穡のまじないのようであって子供の好運を願う場合とも言えないようであるが、それでも女神に飲食物を供して彼女たちの意を迎える習俗があったことをヴォルムスのブルヒャルトと同様伝えている。あるいは神々に飲食物をそなえるのは豊穡を願う場合の古来からの行事であったのが、後々生れた子の好運を願う儀式に転用されたとも考えることができる。

14世紀初めのベルナルド・ド・ギーの『異端審問官提要』にも妖精に関するわずかな言及がある。異端の一種と考えられた「魔女と占い師と降霊術師について」の章で、故人の魂の状態、将来の出来事の予言、まじないや草木による魔術とお祓いと並んで「女妖精」 *fatis mulieribus* が審問の一項目とされている。すなわち「好運をもたらす良きもの *bonas res* と呼ばれ、夜中に徘徊するという女妖精」<sup>(7)</sup>とある。この *bonas res* は先の *dominas (nocturnas)*、あるいは中世フランス語以来の

(6) Guillaume de Lorris et Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, publié par E. Langlois, t. IV, Paris, Champion, 《SATF》, p. 315, note au v. 18427.

(7) Bernard Gui, *Manuel de l'Inquisiteur*, t. II, Paris, Les Belles Lettres, 《Les Classiques de l'Histoire de France au Moyen Age》, p. 22.

bonne dame と同様に妖精を指す言葉であろう<sup>(8)</sup>。

3

ここからしばらく中世フランスの物語とも無関係とは言えない北欧の世界に目を転じてみる。この地にも同一ではないとしても類似の運命の女神があふれていた。12世紀と13世紀の交に生きたサクソ・グラマティクス Saxo Grammaticus は、その著書『デンマーク人の事績』Gesta Danorum 中の伝説的な異教時代の歴史を記述した章で当時の習慣を紹介している。

昔は子供の未来の運命について、運命の女神の神託に相談するのが習いだった。この習慣にならってフリードレーブは息子のオーラーブの運命を知りたいと思い、おごそかな誓いを立てて祈りながら神々の神殿に入り、そこで礼拝所の方をみると三つの座に三人の女神が座っているのが見えた。その中の一人はおだやかな性質の者で、男の子に高貴な姿とあふれんばかりの人々の寵愛を授けた。第二の者は物惜しみせぬ寛仁さを贈物として与えた。しかし第三の者は悪意にあふれた、嫉妬深い女で、姉たちの寛大な一致を拒み、その贈物を台なしにしようと望み、男の子の将来の性質に吝嗇の罪を結びつけた。このようにして他の者たちの好意ある贈物が、厭うべき運命の毒で台なしにされ、その結果、それらの贈物の二重の性質によってオーラーブは物惜しみのなさともまじった吝嗇を仇名としてもらうことになった。こうして最初の恩恵の甘さを、後からの贈物に加えられた汚点がゆがめることになったのである<sup>(9)</sup>。

ここでは子供の誕生に際し家において女神の訪れを待つのではなく、進んで神々の神殿に子供の運命を知ろうとする習慣が記述されている。フリードレーブはそのようにして息子オーラーブの運命について女神の神託に相談に行く。女神の数は神話・

(8) Bonas res については、*Le Roman de La Rose*, t. IV, *op. cit.*, p. 316, note au v. 18438を参照。

(9) サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事績』谷口幸男訳、東海大学出版会、1993年、243ページ。

伝説の定数3である。最初の一人はオーラフに高貴な姿と人々からの寵愛という好運を授け、二人目は寛仁さを贈り物として与える。ところが三人目の悪意をもつ女神はせっかくの好運を台なしにする吝嗇の罪を彼に与えた。複数の女神、妖精の一人が何らかの理由で生れた子に不運を与えるのは、後の中世の物語でも多用される。苦難と冒険を経て最終の幸福という物語の劇的な展開にとっても、主人公に多様な性格を与えるためにも、都合のよいモチーフである。

Parcaeあるいはnymphaeとあるが、これは北欧の運命の女神、ノルン信仰の別名であろう<sup>(10)</sup>。

サクソ・グラマティクスから3世紀余り後のウプサラ大司教の職にあったオラウス・マグヌス Olaus Magnus が残した記述でも運命の女神について同様の話がある。

さらに北欧の国々にはディアナ〔狩猟の女神〕とケレース〔穀物の女神〕の女神に捧げられた若干の神殿があり、その外に人間の手を借りず、魔法によって建てられた運命の女神の建物もあった。古代の人々は子供たちの将来の運を運命の女神にたずねるために、厳かな誓いと祈りを上げながら、彼らに近づくのが常だった。そこで礼拝所の中をのぞくと、あるときは三人の、あるときは何人かの座が、それだけの数の妖精によって占められているのが見えた。妖精のうちのある者は子供たちに、上品な容貌と溢れんばかりの人々の寵愛を授けた。これに対し他の妖精は寛大さなどのすぐれた徳を贈った。最後に、もっと気難しい気質の持ち主で、外の仲間の贈り物を減らそうと望んでいる妖精は、男の子の将来の性質に吝嗇その他悪い性質を与えた<sup>(11)</sup>。

運命の女神に子供たちの将来の運を授けてもらうために誓いと祈りをささげて魔

---

(10) Cf. L. Harf-Lancner, *Le monde des fées dans l'Occident médiéval*, Paris, Hachette, pp. 26-27; S. Ballestra-Puech, *Les Parques, Essai sur les figures féminines du destin dans la littérature occidentale*, Toulouse, Editions Universitaires du Sud, 1999, pp. 52-53.

(11) オラウス・マグヌス『北方民族文化誌』上巻，谷口幸男訳，溪水社，1991年，190ページ。

法の神殿をたずねる。そこには三人の「妖精」の座がある。妖精の一人は上品な容貌と人々からの寵愛を受け、他の妖精は寛大さを受ける。ところが最後の気難しい妖精は仲間の与えた好運を減ずるために子供に吝嗇の性質を与えてしまう。こうして見てくると、オラウス・マグヌスの記述はサクソ・グラマティクスの『デンマーク人の事績』とほぼ等しい。おそらく彼はサクソ・グラマティクスを引き写したのであろう。わざわざ神殿に子の運命のうかがいをたてに行くのは、中世フランスのある武勲詩に歌われる森に行き妖精の来訪を待つ話と類似する慣習であろうか。

4

聖職者の書物を離れて北欧の神話・伝説の中に運命を受ける話を探してみる。エッダの一つである北欧における創世神話であり神統記でもある「巫女の予言」中で、世界樹であるとねりこの大樹ユグドラシルとその樹下にある泉を歌った後で、作者は次のように続ける。

この樹の下にある海から三人の物識りの娘たちがやってくる。一人の名はウルズ、もう一人の名はヴェルザンディ—二人は木片に彫った<sup>(12)</sup>—三人目の名はスクルドという。女たちは、人の子らに、運命を定め、人生をとり決め、運命を告げる<sup>(13)</sup>。

「物識りの娘たち」つまり運命の女神ノルニルは、ユグドラシルの下にある泉を彼女たちの普段の居所としているらしい。ユグドラシルは生命、知恵、運命の樹であるから<sup>(14)</sup>、彼女たちの住まう場所としてもっともふさわしい。そこからやってきてノルニルは人の子らに運命を告げる。三人のノルニルの名ウルズ、ヴェルザンディ、スクルドはそれぞれ過去、現在、未来を表わすとされる<sup>(15)</sup>。

この三人の娘たちの名は『スノリのエッダ』あるいは『散文エッダ』とも称され

(12) ルーン文字を刻むこと。Cf. S. Ballestra-Puech, *op. cit.*, p. 52.

(13) 『エッダ—古代北欧歌謡集』「巫女の歌」谷口幸男訳、新潮社、1993年、11ページ。

(14) ユグドラシル Yggdrasill については次を参照。R. Boyer, *La religion des anciens scandinaves*, Paris, Payot, 1981, pp. 207–215.

(15) Cf. *ibid.*, pp. 215 et suiv.

る作品中の「ギェルヴィたぶらかし」にもあらわれる。「巫女の予言」その他の古いエッダを元にして書かれた北欧神話を概観するスノリ・ストルルソン（1176－1241年）の作である<sup>(16)</sup>。

伝説的な王ギェルヴィは老人の姿に身をやつし、ガングレリと名のってアース神族の秘密を探るべくアースガルズにおもむく。ガングレリの問いに答えて、アース神族のハールは神々の集うとねりこの大樹ユグドラシルについて答える。

櫛の下の泉のそばには美しい館があってその館の中から、ウルズ、ヴェルザンデイ、スクルドという名の三人の娘たちが出てくる。この娘たちが人間の寿命を決めるのだが、彼女たちは運命の女神と呼ばれている。このほかにまだ多くのノルニルがいて、人が生れると必ずそこへ寿命を決めに行く。神族もあれば、妖精族も、小人族のものもある。次のようにいわれているとおりで。

ノルニルは単一の種族にあらずして  
さまざまの生れのものなりと  
われは思う  
アース神族もあれば  
妖精族もあり （ファーヴニルの歌〔一三〕）

すると、ガングレリがいった。

「もし、ノルニルが運命を決めるなら、彼女らはずいぶん不公平な分け方をするものですね。ある者は、豪華なよい生活をしています。ある者は、よい目にも、よい評判にもありつけない。ある者は長寿なのに、ある者は短命です」

ハールはいった。

「生れのよい善良なノルニルはよい運命を下すのだが、悪い運命に出あう人は悪いノルニルのせいでそうなのだ」<sup>(17)</sup>

(16) スノリのエッダについては、『エッダ—古代北欧歌謡集』前掲書、「解説」302－303ページ参照。

(17) 「ギェルヴィたぶらかし」（前掲『エッダ—古代北欧歌謡集』所収）237－238ページ。



引用の前半に語られたとねりこの下の泉のかたわらにある館に住む、人の寿命を決める三人のノルニルの話は、「巫女の予言」からとられたものであろう。また「ファーヴニルの歌」に拠って、ノルニルにもさまざまな種族があると述べられ<sup>(18)</sup>、しかも彼女らはかならずしも公平に人々に運命を分かち者ではない。好運と不運、寿命の長短はそれぞれそれを与えるノルニルの性質によるのである。

シグムンドの子ヘルギにもノルニルたちがやって来て運命を定めた。

鷲どもが鳴き、天山から<sup>きよ</sup>聖い雨が降ったその昔、ボルグヒルドは、ブラールンドで猛きヘルギを生んだ。〔一〕

屋敷に夜が訪れると、<sup>ノルニル</sup>運命の女神たちがやってきて、尊い生れの者に、その場で運命を定め、この者が名だたる君主になり、ならびなき王と仰がれるようになるよう決めた<sup>(19)</sup>。〔二〕

ここでは端的にヘルギが名だたる君主、ならびなき王になる運命が与えられる<sup>(20)</sup>。彼の前にあらわれたのは善良なノルニルだけであったようだ。その後続く歌はかならずしも意味があきらかではない。

彼女らは、ブラールンドで、城を破る者のために、力をこめて、運命の糸を<sup>よ</sup>撚っ

(18) 「ファーヴニルの歌」でも、シグルズはファーヴニルに問うている。「ファーヴニル、賢者といわれ、あまたのことに通じているお前のことだ、おれに教えてくれ。困っているときにやってきて、出産を助けてくれる運命の女神は誰だ」(『エッダー—古代北欧歌謡集』139ページ) 運命の女神は出産の手助けもした。

(19) 「フィンディング殺しのヘルギの歌 I」『エッダー—古代北欧歌謡集』所収、103ページ。

(20) 伝説的サガの一つである「ヴォルスングサガ」でも、ヘルギの運命について同様に語られている。「シグムンドは権勢と名望のある、賢明で大望を抱いた王になった。彼はボルグヒルドという女を妻にした。二人の間には二人の息子ができたが、一人はヘルギ、もう一人はハームンドという名だった。そして、ヘルギが生まれたとき、<sup>ノルニル</sup>運命の女神たちがやって来て彼の運命を予言し、すべての王のうち最も名高い王になるだろうといった」(『アイスランド サガ』谷口幸男訳、新潮社、1979年、544ページ) これは前掲の「フィンディング殺しのヘルギの歌 I」を引きついだものであろう。

た。女神らは、金色の糸を用意し、月の広間の下の中程に縛った。〔三〕

女神らは、東と西にその端を隠し、王の国はその間にあった。ネリの娘は、北にむかって一本の綱を投げ、それがいつまでも保つように念じた<sup>(21)</sup>。〔四〕

運命の糸を撚るのは古来からの伝承としても、糸を月の広間の下の中程に縛る、東西の端を隠す、綱を北にむかって投げるのは何を表わしたもののなのか。ヘルギが手に入れ、保つべき王国の境界を限ったものとも考えられる<sup>(22)</sup>。

ノルニルたちが与えるのはかならずしも好運ばかりでないことはすでに述べたとおりである。アンドヴァリは川に泳ぐかまずに姿を変えられた。

フレイズマルの子レギンがシグルスに語る所によれば、昔レギンの兄弟で瀬に化けたオトがロキを初めとするアース神に殺された。たまたまフレイズマルに宿を求めた神々はとらえられ、身代金として瀬の身体分の金を要求される。ロキは黄金を手に入れるために、かまずに姿を変え黄金を所有する小人のアンドヴァリに綱を投げてとらえる。二人の対話。

(ロキの言葉)

「川の中を流れているこの魚は何だ。不幸から身を守ることもできないでいる。さっさと助かって、おれのために、川の焰（黄金）を見つけてこい」 〔一〕

(師の答え)

「名はアンドヴァリといいます。父はオーイン。多くの滝をまわってきたものです。昔、哀れな運命の女神から、水を渡るように決められたので」<sup>(23)</sup> 〔二〕

(21) 「フィンディング殺しのヘルギの歌 I」前掲書、103ページ。

(22) 「レギンの歌」〔一四〕『エッダー古代北欧歌謡集』所収、135ページにはこうある。レギンがシグムンドの子シグルズを迎えて言う、「この勇敢な戦士をわたしは育てよう。ユングヴィの子が、われらのところにきたのだ。彼は天に並びない王になり、運命の糸があらゆる国々にひろがるだろう」

(23) 同書、133ページ。

アンドヴァリがかますに姿を変えているのも、哀れな（あるいは悪意をもつ）運命の女神ノルンによって定められた運命であった。ブルヒャルト・フォン・ヴォルムにあるパルカエによって誕生の時に人狼に姿を変える能力をえた男と同様、ここではかますへの変身がノルンによって与えられたアンドヴァリの運命であった。

5

ここから中世フランス文学の世界に入っていくことにする。武勲詩、アーサー王物語、冒険物語を問わず、妖精に贈り物を与えられた騎士がいたる所にあられる。中世フランスでも偏愛されたモチーフの一つであろう。英雄には神の加護か、それに代る古来からのあるいは民間伝承中の妖精の保護があったにちがいないとの共通の心意から出たものであろうか。

まず『ユオン・ド・ボルドー』の主人公の一人オーベロンを取り上げる。彼は少なくともその名前において、おそらくは小人という彼の姿形においても、北欧の伝承と無関係とはいえない<sup>(24)</sup>。

物語はシャルルマーニュの臣下ユオン・ド・ボルドーを主人公とし、彼を助ける妖精の王オーベロンが活躍する。オーベロンはジュール・セザールを父とし、妖精モルグ Morgue li fée を母として生れるというこれ以上はない血統にめぐまれている<sup>(25)</sup>。少なくとも登場人物の顔ぶれからみると、フランス、ブルターニュ、偉大なローマの三つの主題を一まとめにした野心的な作である。ところがオーベロンにも一つの欠点があった。彼は三尺の身長しかもたない小人なのである。小ささを補って余りある美しさを持ち合わせてはいるのだが。オーベロンの美しさと小ささは、物語に彼が姿をあらわす前からくり返し強調される。ユオンが越えるべきオーベロンの住む危険な森を前にして、仲間のジェリオームが説明する場面をもって代表させよう。

(24) Auberon の名はゲルマン語の Alberich に由来するとされる。Cf. M. Rossi, *Huon de Bordeaux et l'évolution du genre épique au XIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Champion, 1975, p.347; G. Paris, *Poèmes et Légendes du Moyen-Age*, Paris, Société d'Édition artistique, s.d., pp.72-87.

(25) *Huon de Bordeaux*, édité par P. Ruelle, Paris, PUF, 1960, vv. 9-17.

真実ここには小人が住んでいます。たけは三尺の高さですが、彼の美しさは非常なもので、夏の太陽よりも美しい。まさしくその名はオーベロンと呼ばれています。この森に入って、彼に話しかけようものなら、ここから抜け出せる者はおりません。彼と共にここにとどまれば、生きて逃げおおせることはできません。誠心から申し上げますが、この小人は大変な力をもっていて、森を越えようとしても、十二里も進まぬうちに、目の前に彼が立っているのを見るでしょう<sup>(26)</sup>。

彼は「森の小さな王」le petit roi sauvage<sup>(27)</sup>であり、「小さな人」li petis hom<sup>(28)</sup>、「こぶのある小人」le petit bocéré<sup>(29)</sup>であり、端的に「小人」uns nains<sup>(30)</sup>である。時には「妖精オーベロン」Auberon le faé<sup>(31)</sup>とも呼ばれる。オーベロンの小ささ、美しさはどこから来たものであろうか。シャルマーニュに実現しがたい難題を課せられたユオンは、バビロンに向う途中、エルサレムと紅海の間にあるオーベロンの魔法の森を通りかかる。そこで出会ったオーベロンの姿かたち、神出鬼没ぶりにおどろくユオンに、オーベロンは自分の力の秘密をみずから明かす。

誕生の時は大変な喜びであった。父母は王国のすべての貴族を呼び、妖精たちも母を訪れにきた。中に一人意にそわぬ者がいた。見られるように、彼女はこぶのある小人になるような贈り物をわたしに与えた。かくしてわたしはこうした姿になり、三歳を過ぎてもはや大きくはならなかった。このようにしておいたのを見ると、それから約束に埋め合わせをしようとした。次のような贈り物をわたしに与えたのだ。主の後に存在した人間の中でもっとも美しい人間になるようにと。ここに見られるような者となり、わたしは夏の太陽のように美しいのだ<sup>(32)</sup>。

オーベロンが「こぶのある小人」となったのは、彼の誕生の時に訪れた妖精の中

(26) *Ibid.*, vv. 3174–3187.

(27) *Ibid.*, v. 6.

(28) *Ibid.*, v. 3237.

(29) *Ibid.*, v. 3279.

(30) *Ibid.*, v. 3174.

(31) *Ibid.*, v. 3781.

(32) *Ibid.*, vv. 3518–3532.

に「意にそわぬ者」 qui n'ot mie son gré<sup>(33)</sup>がいたからなのだ。オーベロンに小人の運命を与えたのは第一の妖精であり、不満をいだいた理由は示唆さえされていない。気まぐれなのか、ある種のノルニルのように元来悪意をもつ妖精の一人なのかもしれない。ところが奇妙なことに、オーベロンの不運に埋め合わせをするのは他の妖精ではなく、第一の妖精自身であることだ。自分の言葉に後悔したものかどうか、彼女はオーベロンに夏の太陽のように美しい人間になることを約束する。

第二の妖精以下の贈り物は次にただ列挙するにとどめたい。第二の妖精は人の心を読む力を与えた。第三の妖精は、望む所にたちどころに姿をあらわす時空を超越する力と望むかぎりの飲食物を手に入れる力を与えた<sup>(34)</sup>。第四の妖精は、動物を手なずける力とさらにその上別のものを与えた。そのため「わたしは天国のすべての秘密を知っており、天上で天使が歌っているのを聞く。生きている間は決して老いることはなく、最後に生を終えたいときには、わたしの座は神と並んで置かれている」。<sup>(35)</sup>

死後神の座と並ぶ地位を与えられるとは、妖精の贈り物としては過ぎたものであろう。事実目をつぶっている間に一行の前にオーベロンが壮麗な宮殿と豪勢な食事を現出させた場面で、「皆が見るすべてのものは神からもたらされる」<sup>(36)</sup>、あるいは「イエスがわたしに与えた大きな力」<sup>(37)</sup>と彼は言っている。彼の力は妖精から与えられたというよりも、妖精を通じて神が与えたという体裁をとってキリスト教化されている。それはともかくもともとオーベロンの母親であるモルグは、中世を通じて妖精、魔法使いとされているのだから、わざわざ他の妖精の手をわずらわす必要はないともいえる。しかしただ一点、彼を小人に仕立てるために、母親ではなく悪意のある妖精が誕生の時に彼に訪れたのだらう。

---

(33) *Ibid.*, v. 3521.

(34) この力を実現するためか、オーベロンは魔法の黄金の杯 hanap を所有している (cf. *ibid.*, vv. 3684–3490)。これも彼がもつ魔法の象牙の角笛はさまざまな力をもつが、ユオンが吹くとたちどころにオーベロンは部下を率いて救いにあらわれる (*ibid.*, vv. 3737–3743)。

(35) *Ibid.*, vv. 3579–3583.

(36) *Ibid.*, v. 3606.

(37) *Ibid.*, v. 3673.

ユオン・ド・ボルドーの物語は当時の読者あるいは聴衆に人気を博したようで、武勲詩やアーサー王物語の集成にならって、彼あるいはオーベロンを主人公とした作品が次々と作られた。その一つがオーベロンの幼年時代 *enfances* を曾祖父の代にまでさかのぼって語る『オーベロン物語』である。当然『オーベロン物語』の作品年代は『ユオン・ド・ボルドー』より後で、1260-1311年ごろとされる<sup>(38)</sup>。この作品の作者は誕生に際しての妖精の贈り物、運定めをことのほか好んでおり、妖精の贈り物はオーベロンだけではなく、他の登場人物にもおよんでいる。順次見て行くことにする<sup>(39)</sup>。

ブリュヌオー Brunehaut (オーベロンの祖母、父はユダ・マカベー Judas Macabé) が生れた年のクリスマスに、ユダ・マカベーは祝いの宴をもよおす。宴はてて、父母のかたわらに眠るブリュヌオーのもとに四人の妖精があらわれる。四人の名はエラークル Heracle, メリオール Meliors, セビル Sebile, マルス Marse である<sup>(40)</sup>。四人の妖精は無邪気に笑う赤子の産着をぬがし、火の上にかざす<sup>(41)</sup>。父親が気づいてひそかにうかがうと、一人の妖精が贈り物をブリュヌオーに与える。彼女は誰よりも美しく、愛らしく、かしこくなるであろう。二人目の妖精は300年以上生きる寿命。その後で三人目の妖精は、彼女がすべての妖精たちの上に力をふるい、望むことはなしとげられ、30歳を過ぎてそれ以上は年老いることはないと言った。この願いに四人目の妖精は腹を立て、いらだたしい気持で言う。「わたしの望みは、この子はこの世を離れ、七年後に妖精の国 *faerie* に行くことです」<sup>(42)</sup>。こう言うとブリュヌオーをだきあげ、怒って寝台に投げおろす。こうしていると鶏が鳴き、みなはこの場から見えなくなった。これを見ていたユダ・マカベーはおどろくが、妻には隠しておく。

(38) *Le Roman d'Auberon*, édité par J. Subrenat, Genève, Droz, 《TLF》, 1973. p. XXXV.

(39) 以下の大要は前掲書395-675行による。

(40) *Ibid.*, vv. 402-405.

(41) *Ibid.*, v. 411. この奇妙なしかしおどろくべき「火の洗礼」ともいえる慣習、信仰については別に述べることにしたい。

(42) *Ibid.*, vv. 442-443.

四人目の妖精はなぜ腹を立てたのか、彼女は忘れられて宴に呼ばれなかったわけではない。ブリュヌオーのあまりの好運にねたみが高じ意地悪くなったのか、とりわけ「すべての妖精たちに力をふるう」<sup>(43)</sup>ことが腹にすえかねたのか明瞭ではない。あるいは他の妖精に先を越されたのが口惜しかったのかもしれない。ただ形どりの、物語が必要とする進行と言ってしまうえばそれまでである。最後の妖精の予言であるから、他の妖精が不運をとりつくろう余裕はもはやない。

その後のブリュヌオーはどうなったであろうか。

ユダ・マカベーはすべてを聞いたが期限が来るまで黙っている。ブリュヌオーは予言のとおり、美しく、かしこく、誰にも愛された。しかしユダ・マカベーは四人目の妖精が約束したことが気がかりである。七年目の同じクリスマスの晩に國中の貴族を集めて宴会が催された。王はブリュヌオーのかたわらにすわる。三の膳が運ばれると、そこに大きく頑丈な、36本の枝をもつ角をした鹿があらわれ、王のテーブルに躍り上がってぶどう酒を飲み、立派な角にブリュヌオーを乗せて宮殿から立ち去ってしまう。

ユダ・マカベーは後を追う。鹿の角に乗せられたブリュヌオーは野原に出る。そこには百あまりの天幕が張られており、三千の男女の妖精が集っている。妖精の王が彼女を迎える。ここにいる妖精たちは彼女のものである。年老いた四人の妖精が七年前に与えた贈り物が実現したのである。ここにとどまるかぎり、今後は彼女の望むことはすべてかなえられる。この世から去る前の一月間を除いて、30歳を越えて年をとることはない。父と家族に最後のあいさつを伝えたいというブリュヌオーの願いを入れて、妖精の王は鹿にユダ・マカベーを連れてくるように命ずる。

鹿がユダ・マカベーに言うには、七年前のあの晩の願いが今成就したのだ。そのかわりこの邪悪な願いの報いに妖精は鹿に変えられ、ユダ・マカベーが憐れみの心をもたなければ20年の間元の姿にはもどらない。ユダ・マカベーは娘に会い、共に帰るようすすめるが、ブリュヌオーは帰ることはできない、生涯妖精の国で生きることになると答える。母によろしくとの言伝てをもって父は国に帰る。

ブリュヌオーの誕生の時の約束は成就した。しかしそれらはすべて彼女が妖精の国に行ってから実現するものであった。ブリュヌオーに不運（妖精の国にとっては

(43) *Ibid.*, v. 435.

おそらく幸運なのだが) を与えた妖精は罰として鹿の姿に変えられている。妖精が何らかの必要があって人間を自分の国に拉致するのはケルトの伝承 (あるいは多くの国の伝承) ではよくあることである。ブリュヌオーは妖精の王国の後継者に選ばれたのであろう。

7

妖精の国の女王となったブリュヌオーはローマ皇帝のセゼール Cesaire に求愛され結婚する。息子のジュール・セザール Jule Cesar を得る。ジュール・セザールは祖父のユダ・マカベーの元で育てられる。彼は長じて巨人を退治するなどの武勲を立てた後、母のブリュヌオーのすすめでアーサー王の妹モルグを妻とすることになる。結婚に際してモルグからもたらされたのがあの魔法の角笛である。ジュール・セザールとモルグの間には双子の男子が生まれる。誕生に際してあらわれるのがまたしても妖精である。今回は三人となっている。

彼女がお産をした時に三人の妖精がかたわらにいた。そのうちの一人が初めの子をとり、二番目の妖精が次子を手にした。それぞれ子をあやすのに懸命であった。三番目も喜んで手助けをした。長子をあやしていた一番目の妖精は、全能の神にかけて願った。彼がローマ人の皇帝となることを。次子を抱く妖精はこう願った。彼が愛にめぐまれることを、王の気高い娘と結婚することを、彼女に愛されまた彼女を愛することを、奥方が彼によって、神のめぐみにより、この上ない子宝にめぐまれることを、また何事にも神の御心のままに行うことを。そのあとで三番目の妖精がのべた。彼が賢者となり、この世を造りたもうた者が彼にあらわれ、彼は心から神によく仕え、聖人となって天国に登ることを。その死後も精霊が支配し、その力をもって戦いにあっては正しき者を助け、邪悪な信仰なき者を滅ぼさんことを<sup>(45)</sup>。

(44) モルグは幼いころに妖精の王に連れ去られ、彼からあらゆる魔法を学ぶ。妖精の王が亡くなった時にモルグに与えられたのが魔法の角笛である (*ibid.*, vv. 1205-1225)。

(45) *Ibid.*, vv. 1360-1376.



長子のジョルジュ Georges については何の問題もない。三人の妖精によってほとんど望みうるかぎりの贈り物を手にした。実際に彼は約束どおり後にローマ皇帝となるであろう。父がジュール・セザールであってみれば、それも当然のことかもしれない。

問題は次子の主人公オーベロンである。三人の妖精は彼にも運命の贈り物を与える。

もう一人の子について何が与えられたかお聞きください。この子を抱いている妖精はこのように誓って言いました。彼はジュール・セザールの土地を領じ、モンミュールの都で王冠をいただくであろう。彼のあらゆる願いは何事も実現され、望みのままにすべて成しとげるであろう。また妖精はみな彼に従い、彼の意向に反することはできない。長子を抱いていた者はこれほどの大きな力を彼に約束したのを聞くと、気がふれるばかりのねたみを感じた。安からぬ心で言うには、「そうであるならば、三尺の高さそれ切りで身のたけが伸びないことを願います」。三番目の妖精はそれを見て、声高く言う。「この子はずかしめてこんなことを考えつく者に不幸あれ。わたしの願いは、この子が十五歳を過ぎてから、その日の後は決して年をとらないこと。またこの世を救いたもうお方を除いて、彼以上に美しい者は決して生れないこと。400年を生きて、最後には望む者に領地をすべて残し、ゆずり受けた者はいつまでも享受する。この世の者は誰も彼を苦しめることはできない」。こう言うと、幼児を抱きしめ、口にやさしくキスをした。両の腕にそっと抱きあげ、モルグの寝台に運んで、彼女に渡した<sup>(46)</sup>。

オーベロンを抱く妖精によって与えられた運命は、妖精の女王となった祖母のブリュヌオー（あるいはそれ以前から）の妖精の王国である。彼は王国のすべてを支配するであろう。ところが長子を抱いた妖精のねたみによって、彼の好運は台無しにはならないまでも、半減してしまう。身のたけが三尺以上には伸びないのである。「気がふれるばかりのねたみを感じた」*Tel duel en ot pour poi que ne derva*<sup>(47)</sup>のは自分が抱くいとおいしい長子よりも強大な力を与えられたからなのか、それとも

(46) *Ibid.*, vv. 1386–1415.

(47) *Ibid.*, v. 1396. ねたみ *duel* は痛み、悲しみとも解せられる。

妖精の国を支配し「妖精はみな彼に従い、彼の意向に反することはできない」  
Cascuns faés a lui obeïra / Si que son gré desdire n'osera<sup>(48)</sup>力を与えられて  
みずからも束縛されるのをきらったからなのか、どちらとも読める。支配や束縛を  
きらう反抗する妖精はままだ見受けられるのである。あるいは単に贈り物の授与を先  
んじられ、優先権をおかされた腹いせのためとも考えられる。いずれにせよ腹立ち  
の理由がいくつか考えられる程度に作者の作意が表立ってきている。三番目の妖精  
は不運を補い回復するためにオーベロンに若さと美しさを与えた。『ユオン・ド・  
ボルドー』においては、オーベロンを小人にした最初の妖精が自分の言葉の埋め合  
わせをするべくあわてて美しさも与えて、一人で二役を演じていた。いささかつじ  
つまの合わない思いをさせる行動である。『オーベロン物語』では不運を回復する  
のは三番目の最後の妖精であって昔話の通例に従っている。ここにも作者の技巧な  
り作意が感ぜられる。

さてその後はどうなったであろうか。

モルグは子供を受けとると、いそいで乳を与えた。子は母親の至純の愛を吸い  
出すように、乳の味わいを味わいつくした。彼一人を除いてもはや誰もこの乳を  
味わうことはなかった。そして魂が身体から離れるとき、たしかに彼は天国に行  
く運命に定められたのだ<sup>(49)</sup>。

こうして三人の妖精の願いは定められた。二人の子は様子も身長も同じで、長子  
はジョルジュ、次子は妖精のオーベロン（あるいは魔法にかけられたオーベロン）  
Auberon le faé<sup>(50)</sup>と名付けられる。オーベロンは七歳になってから背が伸びず、  
母親はいたく心を痛めた。背の高さを測ってみると、三尺である。定められた高さ  
であることがわかった<sup>(51)</sup>。

(48) *Ibid.*, vv. 1392–1393.

(49) *Ibid.*, vv. 1416–1422.

(50) *Ibid.*, v. 1429.

(51) なおオーベロンの死後に約束された天国の座は『ユオン・ド・ボルドー』では第四  
の妖精によって与えられたものだが、ここでは母親であるモルグの乳をただ一人吸  
うことによってもたらされたことになっている。モルグも古来妖精の一人であるか  
ら、四番目の妖精の役をはたしたとしても、何の不思議もないわけであろう。

オーベロンの話はさらに多少とも書きかえられる。『15世紀散文ユオン・ド・ボルドー』にあらわれるオーベロン誕生のいきさつでは、オーベロンみずからシャルルマーニュに生い立ちを説明する。

誕生に際して大勢の妖精の国の王侯・貴族と高貴な妖精がいて、みなは出産に当たってわたしの母を見舞いにきたのだ。その中に、わたしが生れた時に他の者のようには招待されなかったと思いこんで、気を悪くした妖精が一人いた。そのために今述べるような贈り物をわたしに与えたのだ。彼女が与えた贈り物というのは、わたしが三歳を過ぎてからは、もはや背が伸びないであろうというものだった。かくして今見るような事になったわけだ。この言葉によってわたしがどうなるかを悟ると、後悔をして他の方法でつぐないをしようとした。今まさに見るような、かつて自然が創造した中でもっとも美しい者になるという贈り物をしたのだ<sup>(52)</sup>。

この物語でも三人の妖精があらわれるが、他の妖精の贈り物は先にあげた韻文『ユオン・ド・ボルドー』と似たようなものか、やや簡略にされたものなので、ここではくり返さない。オーベロンに不運を与えた妖精は、ばく然と意にそわぬ不満を感じたのではなく、誕生に際して「招待されなかった」<sup>(53)</sup>と思いを悪くしたのである。いら立ちの理由がよほど具体的になっている。人知を越えた神の恣意という神秘的なものではなく、日常的な行為の中に妖精の立腹の理由を置こうというのである。オーベロンを小人にしたつぐないに美しさを与えるのは、『ユオン・ド・ボルドー』と同様に、事の成り行きをいまさらながら悔いた自分自身となっている。彼女には名はないが、二番目の妖精はトランスリーヌ Transline という名が与えら

(52) *Le Huon de Bordeaux en prose du XVème siècle*, édité par M. J. Raby, New York, Peter Lang, ll. 1952-1962. 7398-7405行でもこの話は簡略にしてくり返される。ただし妖精の立腹の理由は書かれていない。

(53) *Ibid.*, ll. 1955-1956.

(54) *Ibid.*, l. 1963.

れている<sup>(55)</sup>。またオーベロンに天国の座を約束する四番目の妖精はあらわれない。

オーベロン一人についてさまざまな異本をとりあげて、誕生のいきさつをくらべてきたが、妖精によって小人の運命を与えられたのはオーベロンだけではない。

あのトリスタンとイゾーには実はモロワの森で生れた隠し子がいて、両親の名をとってイザイ・ル・トリスト（悲しみのイザイ）Ysaye le Triste と呼ばれている。彼は孤児となったが、みにくくて小人のトロン Tronc に常に保護されて育つ。やがて彼はブラミールの王イリオンの姪マルト Marthe と結ばれ、マルク Marc を生む。マルクにもまたトロンがつき従う。マルクはオリモンド Orimonde にしたわれるが、離れ離れになっている。さてこのトロンはジュール・セザールとモルグの間に生れた子である。なぜこのようなみにくい小人になったのか、たまたまマルクはその訳を、トロンの誕生に立ち合ったと思われるある妖精に聞かされる。

「彼が生れた時、奥方に会いに行きました。わたしたちは子供にたくさんの贈り物をしました。ところが仲間の一人に悪さをした者がいて、この子はこの世でもっともみにくい者になるであろう、苦悩の橋を渡りねたみの城を征服し、自分の父親が自分の母親と結婚する日に自分もまた結婚するであろう騎士に出会うまで苦しみと痛みのうちに生きるであろう、と言ったのです。このような者を見つければ、彼はこの世でもっとも美しい者になるであろう、しかし決して成長することはない、それでも自分の望むものはすべて手に入れ、望むことはすべてなすであろうとしたのです」<sup>(56)</sup>

こう語る妖精はオリアンド Oriande と言い、モルグは彼女の女主人である。イザイとマルクの父子二代に仕えるトロンもやはり意地の悪い妖精によって、理由は

(55) 妖精の島 Chifalonnys (l. 1747) で角笛を作り魔法の力を付与した妖精は, Gloriande, Transline, Margalle, Lempatrix (ll. 1752-1763) の四人となっているから、オーベロンの誕生に際してあらわれる妖精も Transline と他の誰か二人の妖精であった可能性が高い。

(56) *Ysaye le Triste*, édité par A. Giacchetti, Publications de l'Université de Rouen, 1989, p. 394.

明らかでないが、小人となった。しかし小人となったつぐないに本人によってか他の妖精によってか類くない美しさを与えられたオーベロンとは反対に、この世のものとは思われないみにくい姿にされてしまった<sup>(57)</sup>。ただしある試練を克服すれば美しさを手に入れるという。

物語の最後に、再会したイザイとマルト、マルクとオリモンドは、同じ日に教会で結婚式をあげる。意地の悪い妖精に課せられた難題が克服される日がきたのだ。自分の両親と自分が同時に結婚式をあげる騎士とは、なんとトロンが長く仕えてきたイザイとその子のマルクであった。ある夜トロンの枕元に四人の妖精がきて、課せられたすべての試練は克服されたので、彼はこの世でもっとも美しい者になると言う。

妖精の一人がトロンをつかまえ、着物をはいで裸にし、とある部屋につれて行く。やがてこれ以上はないほど立派に衣服を着て靴をはき、歳は二十で、どうやってもこれ以上美しい者は見られぬほど見目うるわしくなった彼をつれもどした<sup>(58)</sup>。

変身の様相は信仰上のつつしみからか、他の変身を語る多くの物語と同様にあからさまには描写されない。別室につれて行かれ、出てきた時には小さいながらも立派な若者となっていたのである。

ついでトロンはこの際洗礼を受けて別の名をもちたいとイザイに申し出る。自分に洗礼をほどこすべき司教の名をとってオーベール Aubert としたいと思ったが、このような偉大な名をもつにはあまりに小さいから、オーベロン Auberon にせよとのイザイの言葉で、それ以来彼はオーベロンと呼ばれるのである。実にトロンという名はオーベロンの以前の名であったというおどろくべき事実が示される。ついでにオーベロンの名の由来もつけ加えられている。

---

(57) 通常みにくさは悪の表現であるが、小人のみにくさと善良さの混在については次を参照。P. Victorin, *Ysaïe le Triste, une esthétique de la confluence*, Paris, Champion, 《Bibliothèque du XV<sup>e</sup> siècle》, 2002, p. 363; G. Paris, *Poèmes et Légendes du Moyen Age*, *op. cit.*, p. 83.

(58) *Ysaïe le Triste*, *op. cit.*, p. 488.

ここにもう一人妖精のおかげで小人にされた者がいる。サン・ジルのエリーはサラセン人にとらわれていたが脱出し、三日三晩飲まず食わずで森の中をさまよった末に、ちょうど食事の最中の四人の盗賊に会う。そうとは知らずエリーは食物を分けてもらおうとすると、盗賊は身ぐるみはごうとする。怒ったエリーは二人を殺し、一人を逃走させる。残った一人はエリーに命乞いをする。エリーに問われて名前を答え、身の上を訴える。

「殿、ガロパンと申します。アルデンヌの生れ、ティエリ伯の息子。勇ましく、高貴なベラルはわたしの兄。わたしの生れた時に不幸がおそいました。四人の妖精がいて、贈り物を分ける段になると、中の一人がわたしを一人占めしようとしました。他の妖精たちはそれに我慢がならず、かつていつわることのなかった神に祈って、わたしが決して成長せず、いつまでも小さくて、三尺半の背たけにしかならぬように、それでいて馬よりも速く走れるようにしました。たしかにそうなのです、真実受け合います」<sup>(59)</sup>

せっかくガロパン Galopin のもとにあらわれた妖精たちは、内輪もめから彼を足は速いが小人にしてしまった。両親はガロパンの身体の小さいのをいやしんで、彼を海で溺れ死にしようとするが、盗賊に買われて今のような境遇となった次第をさらに語る。ここでガロパンはエリーの忠実な従者、戦友となる。

武勲詩の中にあらわれたガロパンはどこから来たのであろうか。12世紀という成立年代が正しいとすれば<sup>(60)</sup>、『ユオン・ド・ボルドー』のオーベロンから借用するのは難しい。広く流布していた伝承の中から拾い出されたとするしか今はないようだ。

---

(59) *Elie de Saint-Gille*, publié par G. Raynaud, Paris, Firmin Didot, 《SATF》, 1879, vv. 1180-1191.

(60) *Ibid.*, introduction, p. XXIII.

生れた時に妖精によって小人にされた者たちをひとわり見てきた後で、あらためてアーサー王の物語世界に立ちもどってみよう。一人の妖精の機嫌をそこねたばかりに、望ましくない贈り物を与えられる者がいる一方、欠けることのない贈り物を授かった好運の者もある。アーサー王物語中の騎士も、武勲詩あるいは冒険物語の中の主人公も区別なくこの恩恵にあずかっている。ある異伝によれば、そもそもアーサー王自身に、誕生に際して妖精が訪れたことになっている。

ワース Wace の『ブリュ物語』 *Le roman de Brut* を中世英語に翻案したラヤモン Layamon の『ブルート』 *Brut* ではアーサーの誕生の大要は次のように語られる<sup>(61)</sup>。

イゲルネはマーリンのたくらみにより、結婚の前にウサー王の子を宿していた。時が満ちてアーサーが生れると、妖精 *alven* が彼を取りあげ、魔法にかけて彼を最良の騎士、もっとも豊かな王となるような贈り物を与えた。また王侯の徳を与えたので、彼は誰よりも寛大となった。こうしたものを妖精は彼に与え、こうして彼は育った。

ワースにはないこのエピソードは、おそらくフランスの類似の話をラヤモンが取り込んだものであろう<sup>(62)</sup>。作者ラヤモンはなぜこのような誕生譚を加えたのか。終章近くなってアーサー王の最後を作者は先例にならって記す<sup>(63)</sup>。

裏切者で甥のモードレッドとの一戦でアーサー王は致命傷を負う。地に横たわるアーサーは後継者とすべきコンスタンティンに王国を与える。なおその上、自分はアヴァロン Avalun へ、あらゆる乙女たちのうちでももっとも美しい女王アルガンテ、美しい妖精のもとへ行くであろう。そこで彼女は傷をいやし、薬石の効により自分をすっかり健康にしてくれるであろう。その後自分は王国にまたもどり、大きな喜びのうちにブリトン人とくらすことになろう。この言葉と共に、波間に浮びつ

(61) 以下の大要は次による。Wace and Layamon, *Arthurian Chronicles*, translated by E. Mason, London, Dent, 1977, pp. 177-178. ラヤモン『ブルート』大槻博訳, 大阪教育図書, 1997年, 206ページ。

(62) R. S. Loomis, 《Layamon's Brut》 in R. S. Loomis, ed., *Arthurian Literature in the Middle Ages. A Collaborative History*, Oxford, Clarendon, 1959, p. 108.

(63) Wace and Layamon, *Arthurian Chronicles*, *op. cit.*, p. 264. 邦訳前掲書, 294ページ。

つ小さな舟が湖から近づいた。そこにはすばらしい装いをした二人の婦人がおり、アーサーをただちに抱きあげ、急いで彼を運んで静かに彼を抱きおろすと彼らは出発した。ブリトン人は今でも彼が生きている、アヴァロンに美しい妖精たちと住んでいると信じている。ブリトン人はアーサーが帰還する時を今でも待ち望んでいる。

ジョフロワ・ド・モンムートの『ブリタニア王史』、ワースを通じて変らぬアーサー王の最後をラヤモンも記している。アーサー王は死んだのではなく、妖精の島アヴァロンに行ったのだ。アーサー王の最後にふさわしく作者はアーサーの誕生にもぜひとも妖精を立ち会わせたかったのであろう<sup>(64)</sup>。中世の物語世界を席捲した英雄には誕生の時から妖精の加護があったにちがいない。死が先にあって誕生の話が後からつけ加えられたのである。

アーサーの誕生に妖精を立ち会わせたのはワースだけではない。ペルスヴァル Perceval は苦悩の山を目指す冒険の旅を続けている。山の頂上にいたり、そこにあった柱に当然のごとく馬をつなぐと、乙女があらわれる。メルランが立てた最良の騎士を見分ける柱の由来を、乙女は語って聞かせる。彼女の話の始まりはアーサーの誕生の時にさかのぼる<sup>(65)</sup>。

アーサーが生れたとき、彼は自然が作り出した者の中でもっとも美しい者であった。誰もが彼に思いを寄せた。誕生の際に三人の妖精 *trois dames* がいたと父王は聞かされた。その中の主だった一人が、彼は知恵と力、賞讃と手柄と名誉、キリスト教徒の誰よりもあらゆる善にめぐまれるであろうと言った。父のユテルパンドラゴンが心から喜んだ。またある日、ユテルパンドラゴンが居城の窓にもたれて、池と野原と美しい森を眺めていると、一人の娘があらわれる。彼女が言うには、気晴らしを求めて馬に乗っていると夕暮れとなり、美しい野原の泉のほとりにいる美しい乙女に出会う。あれこれ話をしていて、最後に彼女は王であり皇帝であるその父よりも賞讃され恐れられる息子を王は得たと言い、それきり黙ってしまう。早速お話したくて、王のもとに参上しましたと言う。

(64) R. S. Loomis, art. cité, p. 109.

(65) 以下の要約は次による。 *The Continuations of the Old French Perceval of Chretien de Troyes*, vol. IV, *The Second Continuation*, edited by W. Roach, Philadelphia, The American Philosophical Society, 1971, vv. 31791 - 31866.



王にはメルランと呼ばれる自身の予言者がいた。メルランは娘のかたわらにいて話を聞いていたが、一言も発しない。王は彼をかえり見てたずねる。メルランの答えは、息子は勇猛心にあふれ、キリスト教徒の誰よりも広い寛大さにめぐまれる事はよく知っている、多くの王侯・貴族を臣下におさめ、大いなる戦いにも一歩も引かぬ一騎当千の仲間をえるであろう、というものであった。王はこの言葉を聞いて笑みをうかべた。王はメルランにもう一つたずねた。最良の騎士、誰よりも価値のある騎士を知る方法があるのか、分るなら言ってほしいと。メルランは二週間の猶予をえて、最良の騎士でなければ、馬の手綱を掛けられない魔法の柱を立てた。ペルスヴァルが馬をつないだのはこの柱だった。

魔法の柱の由来を語る話のついでではあるが、アーサーには三人の妖精が誕生の時にあらわれ、知恵と武勲のかぎりを与えた。この贈り物を父王は誰から聞かされたとは明確に語られていない。しかし泉のほとりのおそらくは誕生に立ち会った妖精の一人に出合った娘の吉報、予言者メルランの言葉によっても、アーサーの未来が赫々たるものであることが二重三重に念入りに語られる。

10

アーサー王の甥のゴーヴァンも妖精の恩恵をこうむった。彼に与えられたのは特異な力、正午に力が絶頂に達する能力である。

ブルターニュに滞在するゴーヴァンは、ある日無聊を慰めるべくプロセリアンドの森に行く。美しい大鷹を見て追い求めて行くうちに、待伏せした騎士たちの一団に次々とおそわれる。ゴーヴァンは獅子奮迅の働きで敵を倒してゆく。その力の由来を作者のジラルール・ダミアンはこと細かに説明する。

ゴーヴァンが生れたまさにその日に、誕生に居合わせた妖精、魔法をあやつる女たちから彼は好運を与えられた。最初の妖精は大そう勇敢になるように彼を運命づけた。さらに多くのものを与えるには、一時課以降、それ以前に倍する力を得るであろう、正午まではより勇猛さを加えるであろうとした。

もう一人は彼に美と礼節と誠実を与え、さらに多くを与えようと言った。すな

わちさらに価値のある好運、戦闘でいつか疲れきっても、正午をむかえると、たちまち遅滞することなくこの時間になるやいなや、戦いを始めた時よりも力を得て、より大胆により巧みになり、この大きな力を九時課になるまでは持続することをはっきり自分でも自覚するであろうと言った。九時課になってその先は、この猶予は続かない。その後は朝方のようになるが、もはや力を用いる必要もないのである。

たしかにこの運命、この好運は多くの戦いにおいて誰よりも彼には力になった。間違いなく役に立ったのは、敵に負わせた災厄のために相手が束になって彼におそいかかり、ひどい目に遭わせても、今言った時刻、正午と呼ぶ時刻になると、たちまち彼は自分の力が倍加するのが分ったからである<sup>(66)</sup>。

ゴーヴァンが正午に力を得るのは、日が頂点に達するまで光を強める太陽神としての彼の神話的前身からくる本来の属性なのであるが、ここでは妖精、それも「魔法をあやつる女たち」*dames de nigremance* という魔女に近い妖精によって与えられた力となって、神話的世界から遠ざかってしまう。正午に力を得るゴーヴァンの姿は、少くない物語の中で語られている<sup>(67)</sup>。しかしこの力が妖精によって与えられたと伝えるのは、『エスカノール』以外には見当たらないようだ<sup>(68)</sup>。

実際の戦闘においてもこの力はいかなく発揮される。エスカノールとの一騎打ちでの勝負は一進一退であったが、

王の甥は彼に打ちかかるが、エスカノールは疲れた様子も見せない。しかし正午を過ぎると、そこで彼の力は倍加し、たちまちすっかり力を得て、はげしく打

(66) Girard d'Amiens, *Escanor*, édité par R.Trachsler, Genève, Droz, 《TLF》, 1994, vv. 2787-2829.

(67) 例えば『ペルスヴァル第一続編』では、「互いに戦って、とうとう正午となった。まことに確言して申し上げるのですが、この時刻を過ぎると、たちまちゴーヴァン殿には力と勇気が倍加した。疲れも暑さも、まさに正午が過ぎるとひいていった。戦いを始めた時よりも一層沈着、そう快になった」(*Première Continuation de Perceval (Continuation-Gauvain)*, texte du ms. L, éd. par W. Roach, trad. et prés. par C.-A. Van Coolput-Storms, Paris, Le Livre de Poche, 《Lettres gothiques》, 1993, vv. 902-911)

(68) *Escanor*, édité par R.Trachsler, *op. cit.*, t. II, p. 1009, note du vers 2790.

ちかかると、エスカノールのかぶとに一撃を与え、かぶとのひもを切り落とした。かぶとを失い、頭にひどく傷を負った<sup>(69)</sup>。

11

14世紀という後期の武勲詩の主人公リオンも妖精の贈り物にあずかった一人である。自分をおとし入れるために偽りの告発をした者を斬ったヘルパン・ド・ブールジュは、フランスからの追放をシャルルマーニュに宣告され、妻のアリスと共に放浪の旅に出る。ロンバルディアの森に来ると、かねて子を見ごもっていたアリスは急に産気づく。ヘルパンは急ぎ人を探しに行くが、帰りを待つまでもなく、アリスは男の子を産んだ。右の肩には王の印である赤い十字の印がある。そこに三人の盗賊があらわれ、美しいアリスを高値で売りさばくためにさらって行く。

見目うるわしい母親を子が失った時に、四人の妖精がその場をおとずれ、子供をあやし、産衣でつつんだ。あざやかに光る赤い十字を見た。妖精の一人が言う、「わたしが子供に与えるのは、危険から彼を救う価値ある力強い贈り物です。彼がはせ参ずるいかなる戦闘でも、殺されたり傷つけられたりすることはないし、いかなるけものも彼を食い殺すことはないでしょう」。ついでオリアンドが言う、「あなたはほめたたえられるべきです。わたしはまた彼を人に恐れられるようにしましょう。いかなる国にも彼に勝る勇敢な者を見い出せないほどに」。三番目の妖精が手短かに話せば、こう言う、「彼にはなすべきこともたらずべきものが多くあって、ついには名誉を登りつめることを望みます」。四番目となったモルグはとてもいら立ちこう言う、「皆さま方、一体そんなものは退けるべきです。それよりもこの子の立身のために、支配すべき王国を死ぬまでに手中にし、より名誉をたたえるために王冠をいただきさせることにしましょう」。ここで妖精たちは子供から離れ、彼をそこに置いてそっと立ち去る<sup>(70)</sup>。

(69) *Ibid.*, vv. 21280–21289.

(70) *Lion de Bourges*, édité par W. W. Kibler, J.-L. G. Picherit, et T. S. Fenster, Genève, Droz, 《TLF》, 1980, vv. 419–440.

三人の妖精はそれぞれ生れた子に贈り物を与える。他の妖精に先んじられて、おそらくは妖精の女王であるモルグはいら立つ。しかし彼女は他の物語でのように、腹立ちから子供に不運を与えはしない。むしろ前の妖精に倍する贈り物、王位につくという好運を与える。そこに森を支配するどう猛なライオンがあらわれ、子供を森の中の巣に連れさる。しかし妖精に与えられた贈り物のせい、ライオンは彼に害を加えず、かえって四日間彼に乳をやって育てる。主人公の名リオン Lion はここに由来するのである。もどって来たエルパンは子供もその母親も失ってしまう。とは言え、末はめでたしで物語が終るのは紹介するまでもない。

12

最古の武勲詩『ローランの歌』 La Chanson de Roland, 『シャルルマーニュのエルサレムとコンスタンティノーブル巡歴』 Le Voyage de Charlemagne à Jérusalem et à Constantinople, その他の武勲詩をつなぎ合わせて作られた『散文回復者ガリアン』の主人公ガリアン Galien も妖精の贈り物を受ける。

もっともガリアンの前に祖父のコンスタンティノーブル王ユゴン Hugon も、その富を妖精から享受している。彼は狩りなどにうつつを抜かすこともなく、ひたすら豚や牛、羊を大切に養っている。そのために豚飼いは宮廷でも地位が高く、彼らの野原の天幕は王侯貴族のそれと見まごうばかりの豪華さを誇っている。それというのも、「多くの人が言うには、ユゴン王は幼児の頃妖精たちによってこのように運命づけられたからである」<sup>(71)</sup>

さて主人公のガリアンについてである。聖地順礼の帰途、シャルルマーニュと臣下の十二将は、コンスタンティノーブルに立ち寄る。シャルルマーニュの臣下オリヴィエ Olivier は、冗談から出たまことで、皇帝ユゴンの娘ジャックリーヌとの間に子をなした。やがてオリヴィエはジャックリーヌとの再会と結婚を約してシャルルマーニュと共にフランスに帰還する。

(71) *Galien le Restoré en prose*, édité par H.-E. Keller et N.L. Kaltenbach, Paris, Champion, 《Nouvelle Bibliothèque du Moyen Age》, 1998, p. 23. 印刷本では、「彼は幼児の頃一人の妖精によって運命づけられて、彼女は彼に耕やしこの世でもっとも裕福になる運命を与えたといわれる」(ibid., p. 180) とあって、妖精は一人である。

残されたジャックリーヌは父の皇帝によりコンスタンティノーブルから追放され、とある貧しい女のもとで子を出産することになる。この女の家の裏手には泉があり、娘はしばしばそこに遊びに行く。ある朝娘が起きて泉に来ると、たちまち陣痛に苦しめられる。聖母マリアに救いを求めると、神の恵みで、娘の声を聞いた二人の妖精があらわれ、子を取りあげる。子はとても可愛らしく、妖精の気に入る、二人は彼の大きな美しさを喜ぶ。そこで二人の妖精は子に贈り物をする。二人の名はガリエンヌ Galienne とエグランティーヌ Aigletine である。たがいにゆずりあったところで、まずガリエンヌが子供の未来を予言する。彼は生涯苦難の道を歩むであろうが、一生獅子のように勇敢で、裏切りによって死ぬことはないであろう。戦いであっても、三日以内にいけない傷を受けることはなく、死ぬまでにコンスタンティノーブルの王となることを約束する。また母親が自分たちを忘れぬために、自分の名を取って子はガリアンと呼ばれるであろう。ついでエグランティーヌが言う。彼が生きているかぎり、槍試合で負けることも、敵に対して半歩でもしりぞくこともなく、キリスト教世界が安んぜられるよう多くの異教徒を殺すことになろう。死ぬまでにはエスパーニュの王となり、シャルルマーニュの十二将が死んだ後には、シャルルマーニュを助けて数々の武勲をあげよう。ガリエンヌが付けくわえるには、シャルルマーニュを助けキリスト教世界を保護するのであるから、彼は回復者 ガリアン Galien le Restoré の名をえるであろう。こうして澄んだ泉のほとりで、二人の気高い妖精によって子供は名を与えられ、妖精たちは去って行く<sup>(72)</sup>。

武勲詩に粹を取ったために、ガリアンに与えられるのはもっぱら力と勇敢さであり、異教徒の討伐であり領土の獲得である。二人の妖精は贈り物を与える優先権を争うこともなく、たがいにゆずり合う。それでも妖精があらわれるのは泉のほとりであり、少しばかりケルト風の衣装がまとわされている。

妖精によって好運や不運を与えられる物語の主人公は以上でつきるわけではない。「火の洗礼」によって不死の肉体を与えられようとした英雄、「眠れる森の美女」のように妖精によって百年の眠りについた王女、最大の好運ともいべき妖精によっ

(72) 以上の大要は前掲書38-39ページによる。印刷本（同書199-201ページ）でも、細部に違いはあるが物語としてはほぼ同一である。

て育てられた騎士，アーサー王のように妖精の島に連れ去られた人々もいる。はては妖精は舞台に上せられたり，妖精に扮した魔女が喜劇的な場面に登場して，人々の運命をいつわって定めたりもする。しかし妖精に愛された他のさまざまな騎士たちに関しては，次の機会を待つことにしたい。